

戦後がだんだん近くなる

橋爪大三郎
Daisaburo Hashizume

子供のとき、戦争の話聞いた。それは、はるか昔のことだった。大学のときに、七〇年安保があった。二十五年前の戦争は、やっぱり昔のことと思われた。

それからいろいろあって、まもなく戦後五十年。だがなぜか、戦争がすぐこの間に思えるようになった。自分が戦争のすぐ後に生まれたと、実感できるようになった。

時間が経つほど、ある出来事の起こったのが、ついこの間のことのように思えてくる。不思議である。これはどういう理由によるのであろうか？

ひとつには、自分が長く生きるにしたがって、時間の重みが軽くなるせいだろう。子供のころの数年は、数十年にも等しい。あとでその数年が、あっという間に過ぎたことがわかると、感覚を修正するというわけだ。

もうひとつは、読解能力が高まるせい。茶色くなった小学校の入学式の写真をひっきり

出して見ると、どこの難民かというような貧しい身なりの一団だ。そのころは気がつかなかったが、親たちの苦労がしのばれる。巡洋艦に乗務していたという元海軍士官のクラス担任。彼が、戦後をどう戸惑いながら生きていたかが、今なら想像できる。

子供のころ住んでいた社宅は、山の中腹にあった。再開発のため雑木林を伐りはらった。焼夷弾がたくさん出てきた。六角形の鉛筆のような鉄のパイプが地面につき刺さっていて、ひっこ抜くと黄色い油とガソリンが出てきた。その先にある、空襲で焼け落ちた大邸宅の跡地も、恰好の遊び場だった。

私はじつは、戦争の余韻に囲まれて生きていたのだ。

最近、中国へ旅行するチャンスが多くなった。年配の人と会うときには、特に気をつかう。奪い取った日本刀を記念に寝室に飾っている、共産党の古参幹部もいる。年配のひとなら、たいていは、日本軍に殺されたりひどい目に遇ったりした家族や親戚が大勢いる。彼らにとっても、その子供たちにとっても、「日本」の二文字には、忘れようにも忘れられない記憶がこびりついている。日本では、戦争は過ぎ去ったものとして確実に忘れられつつあるが、中国では重い過去として、現在を見ずえているのだ。

この地で戦争は、常時ストリートに話題となる。むしろ避けられがちなのは、国民党に加わった親戚の話や、文化大革命当時の回想のたぐいだ。そして話題となる「日本鬼子」や「小日本」は、恐怖や侮蔑の対象である。いずれにせよ日本は、加害者である。

日本のテレビは年中行事のように、八月になると戦争特集を組み、戦争の記憶を風化させないようにと繰り返す。ただその中身は、空襲や疎開の辛さ、肉親を失った傷みや食糧難にすぎない。戦争は悲惨だ！もう戦争はいやだ！平和を守ろう、というワン・パターンだが、そこからは意味のある結論は出てこない。なぜなら、いまはもう平和なのであり、平和を守るためにこれ以上何かしなければならぬわけではないからだ。

日本が加害者であった事実が、ここではすっぱりと抜け落ちている。日本人が国外でどうふるまい、それが近隣諸国の人びとをどのように苦しめたか。それが視野に入らないなら、戦争の記憶ははじめから風化しているのである。

日本人は、過去（歴史）と向き合うのが苦手である。

日本人にとって、過去は過ぎ去ったもの。ことをあらだて、昔のことを蒸し返すのは賢明なやり方だと思われていない。これに対して、ユダヤ人やローマ人や中国人のように、歴史書を編みだす人びとは、民族問題に苦しみ抜いた民族である。異民族との戦いに勝利し、あるいは屈伏させられた記憶は、代々うけ継がれて、領土や宗教の自由やさまざまな権利を要求する根拠になる。百年たとうが千年たとうが、そうした過去は忘れられない。日本人の戦争記録が中途半端なのは、加害者が口を開かないからである。加害者としての発言を、誰も聞きたがらないからである。

『ゆきゆきて神軍』という記録映画は、この事情をよく描いていた。ニューギニアの奥地

で孤立した部隊が、密林を潰走し食人行為を繰り返したあげく、数人のみとなって生還した。その生き残りを一人ひとり、主人公奥崎が訪ねて歩く。彼は上官を殴り倒して営倉に入っていて、食人には加わらなかつたのだ。平穩に洋裁店を営んでいる老人に、奥崎は殴りかかり、馬乗りになり、首を締めて、やっと彼の口を開かせる。そうやって少しずつ、白人捕虜を白ブタ、原住民を黒ブタと称し、同僚の兵士まで弱い者から食べていった恐るべき部隊の実態が、明らかになっていく。

数多くの日本軍将兵が、戦争の現実を直面して思い悩んだことだろう。そして、彼らの選択は、沈黙することだった。周囲の人びとの平穩な生活を乱すべきでないと考えたからだ。口を開く場合でも、語るべきことと黙すべきことが慎重に仕分けられた。こうしてわれわれは、集団的健忘に陥り、過去の戦争に直面することができなくなっていく。

過去に直面できなければ、過去から学ぶことができない。過去から学ぶことができないれば、同じ過ちを繰り返すかもしれない。こういう危うい国家が、憲法を改正し、国連の常任理事国に加わるかもしれないという。そのこと自体は、もっともな選択肢であろう。けれども問題は、その選択肢を前にした日本人を、信用できるかということなのだ。

戦争が終わってから五十年経ったが、その間に日本人が賢くなったとは思えない。それは日本人が、誰ひとりとして、自分が戦争を始めたと思っていないからだ。そして、戦後は遠くなったと思っっているからだ。責任のないところに、教訓はないのである。（社会学）

1995-48-②/5

さまざまな犬たち

橋爪大三郎

兄や姉たちが一匹ずつ、犬や猫を飼っていた。それでは足りずに、拾ってきた。子犬や子猫も生まれた。だから家中、動物だらけだったような気がする。

そのころは空き地に、よく子犬や子猫が捨ててあった。ダンボールの箱に、まだ目のよく開かない犬たちが、折り重なるようにクンクン鼻を鳴らしており、ビスケットのかけらがオシッコでびしょびしょになっている。そのまま通り過ぎることができず、連れて帰るのはたいてい二番目の姉だった。もちろん、飼っていいと許可の出るはずもない。捨てに行くお供は、私の役目である。小皿にミルクを注ぎ、犬たちが夢中になっている隙に、脱兎のごとく逃げ帰る。クンクンと足にまとわりつかれないように。

子犬が生まれると、半分はすぐ死んだ。生き残ったのも、食べ過ぎて死んだ。餌をやりすぎると、腹がぱんぱんに膨らむまで食べ、翌日には死んでしまう。死んだ子犬は、ビス

ペットへの 感謝状

第二信

現代書館編集部一編



キミのそばなら、 こんなにウレシイ

赤塚不二夫・松本零士・橋爪大三郎氏等60名の執筆。
ペットへの愛情と思い出を綴ったエッセイ集第二弾。

噛まれても平気
現代書館

おまけ

オウムに関心薄い大学祭

いま真っ盛りの大学祭で「オウム問題」を取り上げた企画が、あまり見当たらない。

一九九一、九二年の大学祭では、麻原彰晃被告が東京大学や京都大学など八つの大学で講演をして、盛況だった。大学で専門知識を修めた人たちが犯罪にかかわったことや、若者がオウムに引き寄せられることなど、大学祭は「オウム問題」を考える格好の場となっても良きものなのに、学生たちの反応は、どうも鈍いのだ。

したのは東京、京都、東北、信州、横浜国立、大阪、千葉、東京工業の各大学だ。これらの大学で今年、一連の事件を踏まえ、オウム関連の企画を行ったのは東北大だけだ。

京大の大学祭実行委員会「講演会は四つ主催するが、京大生の関心や意識を反映しようとしたもので、時事的なテーマを扱うわけではない。特定の宗教にかかわる講演を取り上げようという意見はなかった」と

説明する。東大もオウム関連の企画はない。「オウムには興味があります。でも、くだらない、と流しちゃう人も多い。事件がちょうど渦中にあるから、冷静に考えるにはもう少しよっと見たいなっと思っています」。十一月下旬に開く「駒場祭」委員会のメンバーはそう話す。「社会に関心がないわけじゃないんです。でも宗教

ケットの空き缶に入れ、遠くのほうまで埋めに行く。スコップで穴を掘るのは、またしても私の役目。土をかけて墓のかたちにし、棒を立てる。姉がお経の真似事のようなものを唱え、水をかけておしまい。帰り道はみな口をきかない。大きくなる犬もいる。姉が拾ってきた四つめの雑種は、名前をメロと言った。(名前はいつも兄がつけるのだが、なぜメロなのかは不明。)鎖もつけない放し飼いで、夕方になると門の前に腹ばいになり、家族の帰りを待っている。数年たつて、昼間決まっていなくなるようになった。不思議に思っていたら、なんとよその家に入りこみ、餌をもらってお手やチンチンをしていることがわかった。さしずめ、別宅である。まったく犬の考えることはわからない。

(はしつめ だいさぶろう・大学教員・四十七歳)

1995-48-④/5
2刷出来!

橋爪大三郎

橋爪大三郎

社会学者

ミッション・コーラ

普及時代のテレビは白黒で、動画もチャ
チで、映画館で観るカラーのデイズニーの
足元にも及ばない。狼狽な世間が土足で家
に入り込んできたような気がした。

よくわけのわからないコマーシャルが多
かつたなかで、ミッション・コーラはひと
きわ不思議だった。サイダーやラムネなら
いざ知らず、当時の小学生はコーラなど見
たこともない。それなのに、「ミッション・
コーラ、トテチタタ」と、コーラの瓶（コ
カ・コーラのように凝ったかたちでなく、
にんべんのつゆみだいなやつ）が毎朝ブラ
ウン管のなかを行進するのである。私は何
となく、六本木が青山に行けば買えるのか
とも思ったが、そんなことも忘れてしまい、
気がついたらコマーシャルそのものも姿を
消していた。たぶん、コマーシャルとはか
くあるべしと知らしめる、ミッション（任
務）を果たし終えたのだから。

布施英利

評論作家

ハンガリー? (日清カツアヌードル)

「食」というのは、生物としてのヒトにと

って最も根
きるため」
った現代、
人を使った
脱帽した。
「24時間戦
シャルが海
このコマー
ている。フ
Dも大自然
ングリー精
が日本の目
済成長を終
「生物として
ろにいる、と

母崎

イエイエ
振り返つて
いろんなシ
て来た、格
私も若くて、
気分が過
の「イエイ
ギーのよう
で、「レナウ
イエイエイ

ナンシー関

ケシコム版画家

「生」の街が
イェーの街が

1995年の予想として、プ
ムと言えるほど流行るのは、人物な
ら中井貴一、モノだったら「生」仕様
のモノだと予測します。
中井貴一 大人気、「キーチ」と呼ばれ
「Keeechi」と表記。「e」の数は臨
機応変で増やしてもいい、渋谷の街は「キー
カジ（貴一カジュアル）」族で埋めつくされる
でしょう。人気の原因は知りません。プームと
はそんなものだから。
「生」プームも必至。一般家庭でもわさびとい
えば、「生わさび」を指すようになったのはこ
こ1〜2年のことですが、同様にあらゆるもの
が「生」化します。生食用の野菜（カボチャや
さつまいも）、肉、生の干しいたけなどという
不条理食品まで登場。食べ物以外でも生毛布
（ひつじ臭い）、生机（青臭い）、生アルミホイ
ル（アルミ臭い）、生たわし（使いにくい）な
ど、いささかプームに便乗した感のある商品が
ヒット。でも「生タバコは癌にならない
い」というのはデマだったようです。

橋爪大三郎

社会学者

去年のしょっぱなに羽田首相、村山首相の誕
生を予測できた人はいなかったろう。今年も何
が起きるかわからない。長期トレンドとして言
えることだけのべるとしよう。
年末にアメリカの金利が引上げられ、日本は
もちろんドイツを上回る水準となった。アメリ
カの財政赤字の穴埋めの窮余の策だが、景気の
足を引っ張りそう。日米独とも経済はダツチ
ロール状態、ツケの回しあいが続く。
これにひきかえ好調なアジア圏は、次のA P
E C総会に台湾の李総統が出席できればさらに
弾みがつく。北朝鮮、鄧小平といった爆弾をう
まく処理すれば、21世紀までにその実力は倍増
しそうだ。また最近、欧米資本のインド投資が
プームとなっている。
さっぱりなのが、旧ソ連東欧。遊休設備と失
業者が溢れているなら、ケインズ政策による公
共投資が有効なはずだが、あいにく設備は超旧
式。ないより悪い。第三世界も活気なく、明暗
を分けた不均等発展が続きそう。

1995-48-⑤/5

とを忘れ、たとえ日本近現代史を学んでも、それが幼児期の「満州」の記憶と重なることはなかったのである。

こうした幼児期の「満州」が再び蘇ってきたのは、三十を過ぎて植民地時代の台湾文学を研究し始めてからのことである。人々の記憶の中に立ち現れる美しすぎる「台湾」の物語へのいらだちが、ふと我が家に伝わる私的な「満州」を思い出させた。病身の祖父を連れて経済的には不遇であったはずの祖母の満州の記憶も、何故か暗い美しさに満ちていて、恐らくはどこか深いところで私を呪縛しつづけているのだろう。同様に、今も日本のどこかで語り継がれている幾万もの失業園の物語がある。結局、植民地研究とはこうした美しき亡霊たちとの果てしなき闘いなのかもしれない。

ミネラル・ウォーター ○橋爪大三郎

日本人は、水道の蛇口をひねれば水が飲めるのが当たり前だと思っている。私もそう思っていた。外国では、そうと限らない。頭でわかってはいたが、七年前に上海に行ってみたら、こんなに黄色くて臭いのする水があるのかと閉口した。

もちろん沸かさないと飲めない。

中国の留学生は、日本に来るとよく、歯が弱くなったり髪が抜けたりする。アルバイトがきついせいや、ストレスのせいではと思うが、水が原因だと本人たちは言う。たしかに日本の水は極端な軟水だが、中国の水は硬水で、体調に影響するのかもしれない。

勾配がゆるやかで河がゆったり流れる中国やヨーロッパ大陸では、水がすぐ淀んでしまう。飲む水が少ない。そこで、鉱泉水(ミネラル・ウォーター)が歓迎される。水と平和はタダ(ついこの間までそうだった)と思っている日本人には、濡れ手に粟のずるい商売に見えてしまう。

そんな日本でもここ数十年、ミネラル・ウォーターが売れ始めた。高度成長のころに建ったマンションや高層ビルがけっこう古くなり、屋上の貯水タンクにはゴキブリやネズミの死骸、水道管も錆びついてとても飲めたものではなくなった。仕方がないので、スーパーでボトル入りを買う。そんな習慣が始まった。都市という人工空間では、もともとただだった自然(うまい水)を、高い金を払って買い戻さなければならぬのである。

コーラや缶コーヒーの自販機も増えるだけ増えた。最近の若者はこらえ性がなく、喉が乾けばすぐに一〇円をスロットへほおりこむ。自然の欲求を水道の水で満たすという発想

がないらしい。昔はいい家の子は、外で飲み食いなどしなかった。そんなしつけが時代遅れになってしまった。親がミネラル・ウォーターを飲んでいのに、子供がコーラを飲んでいけないわけがあるのか。

もともとミネラル・ウォーターに、まったく効用がないわけではない。妻が便秘がちなので、水が違うせいかもしれないと思いつつ、フランスの鉱泉水を勧めたところ、「おなかをぐるぐるする」と言う。最近は一缶三九円のアメリカー輸入のコーラを愛飲している。これも元をたせばアメリカの水、ミネラル・ウォーターのなれの果てに違いない。海外に住む日本人は、「富士山麓の水」などを飲みたくなるのだろうか。国際化の時代、故郷を離れた腸内細菌を元気づけるため、パッケージされた水がはるばる地球の反対側まで送りとどけられていると思うと面白い。

野菜スープ ○阿部菜保子

「野菜スープ」といえば、たいがいの人はあの「野菜スー

「健康ブーム」というのがいつのころからかわき起ってき

て、その中に「健康食ブーム」というのがあります。「紅茶きこのこ」はたいそう流行って、当時まだ子供だったわたしでも、その名前だけは憶えています。そのほか、「青汁」とか「ローヤルゼリー」とか、数えきれないほどの大小のブームがありました。

「紅茶きこのこ」のように、賛否両論ふくめて大々的に話題にされる「健康食」には、なにか得体の知れないものに対する好奇心がそのブームの原動力になっているように思います。それを食べるのに、ある程度の勇氣、とはいわないまでも、決心を必要とされるようなもの、イモリの黒焼きとかママンのエキスやなんかに一脈通じたところがあるような……。「スゴク効きそう」と「なんだかアヤしい」がウラハラの世界です。

それにひきかえ、ついこの間話題になった「野菜スープ」は、そのネーミングからしてアヤシ気なところがまったくなくて、あまり抵抗感がわかない感じがします。インパクトがあまりない。